

巻頭特集 ChatGPT、どう使う？

皆さま、こんにちは。私たちの日常は、技術革新によって飛躍的に変化しています。この急速な変化の中で、人工知能の進化はますます重要性を増しています。本特集では、その最先端の一例として「ChatGPT」に焦点を当て、その活用方法を探求します。

ChatGPTは、OpenAIの最新技術であり、言語理解と生成の分野で優れた性能を発揮します。本特集では、ChatGPTの仕組みや、教育、統計解析への応用方法を、幅広い視点からのアプローチを実際に活用されている3名の先生方から倫理的かつ効果的に利用するためのベストプラクティスをご紹介します。

我々は、この特集を通じて、ChatGPTの可能性を探り、その新たな展開に向けての洞察を得ることを目指しています。滋賀での第34回疫学会においてもプレセミナーが開催されるとのこと。情報交換と共に、未来への一步を踏み出しましょう。〔上記の挨拶文はChatGPT-3.5（無料で使用可能なもの）を使い、数分の内に作成できました。いかがでしょうか？〕

(大阪国際がんセンター 小山 史穂子)

ChatGPT、論文執筆でどう使う？ ChatGPTを含む大規模言語モデルの仕組み

国立感染症研究所
米岡 大輔



OpenAIが設計したChatGPTは、大規模言語モデル(LLM)として知られ、生成モデルの最先端に位置します。生成モデルとは、特定の条件(例:質問文)を元にデータ(例:回答)を生み出すモデルを指します。LLMの進化に伴い、疫学研究の多方面にわたる利用が増大しています。ここではLLMの背後の仕組みについて簡単に説明します。

LLMは、膨大なテキストデータを基盤とし、Transformerという構造を活用して単語列から次の単語を予測する、というモデルです。Kaplan et al.(2020)の研究は、言語モデルの“べき乗則”を示し、モデルのデータ容量が増加す

CONTENTS

巻頭特集「ChatGPT、どう使う？」	日本疫学会サマーセミナー2023開催報告
ChatGPT、論文執筆でどう使う？	 後藤 温 6
ChatGPTを含む大規模言語モデルの仕組み	疫学専門家認定制度 5年目を迎えて
..... 米岡 大輔 1	～経過措置の終了と更新の開始予告～
ChatGPT、大学講義でどう使う？	 尾島 俊之 7
..... 柿崎 真沙子 2	研究室紹介
ChatGPT、論文作成でどう使う？	東北大学大学院歯学研究科
..... 永井 雅人 3	国際歯科保健学分野
第34回日本疫学会学術総会	地域に根差した国際研究を！
「疫学が創る未来社会」	 小坂 健 7
..... 三浦 克之 4	一般社団法人日本疫学会代議員・
日本疫学会プレセミナー2024 開催決定	選出理事・監事・理事長選挙について ... 8
..... 本庄 かおり 5	事務局だより 9
	編集後記..... 9

るにつれて精度も向上することを実証しました。これによりどの程度データを揃えればどれくらいの精度が出るのか、に対する見通しが立ちました。加えて、Wei et al. (2022) の研究では、モデルが大規模化することで、数学問題の解決や翻訳といった複数の能力が急速に“創発”することも明らかにされました。

では、LLMが内部で行っている、「単純な次の単語の予測」だけで(と言っでは言いすぎですが)、我々が感じる知能や理解といった高度な行動を模倣できるのはなぜでしょうか? この点について近年急速に理論解析が進んでいます。Lecun (2019) のプレゼンによると、「自己教師あり学習」が鍵となることが分

かっています。自己教師あり学習とは、例えばデータの一部を故意に欠損させそれを予測する方法であり、事実上、無限にデータ量を増やすことができる仕組みとなっています。LLMではこれを用い、次の単語をうまく予測するために、まずは単語の意味、次に文全体や背後情報までを順次理解する必要に駆られるため、広範囲の知識を身につけることに成功していると予想されています。

疫学分野でのChatGPTの応用方法は多岐にわたります。例えば、文献調査(論文内容の素早い調査)、データ分析サポート(予備的解析はPluginを入れることで既に可能)や啓発と教育(疫学関連

の情報を一般の人々に伝える際、ChatGPTは疫学の専門家としての役割を果たすことができます)などが挙げられます。しかし、未解決の問題も多々あります。例えばハルシネーション(非実在の回答)の根本的解決は現在の枠組みでは難しいと言われています。また、そもそもLLMがどう文章を生成しているかに関しても未解明な部分が多く残されています。それでも、LLMの適切な活用により、今後も疫学のフィールドでの研究をサポートし、より高度な研究の実現を助けることでしょう。詳細は学術総会にお越しください。この文章を書くにあたってはChatGPTの助けを借りました。

■プロフィール

個別化医療のための生物統計学と機械学習の理論的側面に取り組む。

2016年に総合研究大学院大学で博士号(統計学)を取得し、米国(St.Jude Children's Research Hospital)とスイス(ETHチューリッヒ)でポストドクを開始。その後聖路加国際大学を経て現在は国立感染症研究所で統計室長。

生物統計学と機械学習の分野に広く興味を持っており、特に個別化医療への応用に力を入れている。統計学をパンデミックに関わる医学・疫学・公衆衛生に応用することも研究対象としている。

ChatGPT、大学講義でどう使う?

名古屋市立大学大学院 医学研究科 医学・医療教育学分野 講師
柿崎 真沙子



非常勤先のとある大学で、公衆衛生や予防医学に関する講義を12コマ(1コマ90分)持っています。以前の授業評価は記述式試験でしたが、コロナでオンライン講義になったのを機に、〇〇(例: コホート研究、ROC曲線など)について400字程度で説明せよ、という課題を1コマにつき5題程度出す形式に切り替えました。昨年度まではそれでそれなりにうまくいっていたと思っていたのですが、2023年度初頭にChatGPTが出たことで様相が変わりました。課題文をそのままChatGPTに入れば、一瞬で課題が終わってし

まうからです。そこで今年度は課題数を半分以上に減らし、それぞれの課題についてまずはChatGPTに問いを投げかけ、ChatGPTの出した文章をコピペさせ、ChatGPTが出した文章の誤っている点や足りない点を補って考察し、自分の答えを記載するという課題に変更しました。採点はChatGPTの文章を確認し、それに対応する学生の文章を確認しなければいけないので手間がかかりましたが、その分課題数を減らしていたので、昨年度までの採点時間と大きな差はなかったと思います。

また、今までは課題を採点していても「同じサイトや教科書を参照してコピペしたんだろうな」と感じるものが結構あったのですが、今年度の課題では比較や考察が必要なため、学生が自分の言葉で書かなければならなかったようで、明らかなコピペとわかるものも減りました。こちらについてはうれしい誤算でした。

講義開始前に実際自分でChatGPTをいじってみてその優秀さに驚いたため、苦肉の策で生み出した課題でしたが、回答の中にはChatGPTの問いかけ方などの違いによって不完全な回答

が出てくることもあり、学生からも「生成系AIの回答はあっていることもあるが、必ずしも正しくないことがある

るので鵜呑みにせずちゃんと見極めることが大事だと思った」といった感想があり、メリットデメリットを提示す

ることを含め、学生たちが生成系AIをうまく活用していくような教育を実施することが重要だと思いました。

■プロフィール

2004年明大農学部農学科卒。09年東北大大学院医学系研究科障害科学専攻修了。博士（障害科学）。東北大助教、藤田保衛大（当時）講師、名市大医療人育成学分野などを経て現職。専門である疫学・公衆衛生学の経験を生かし、現在は医学教育学分野で教学IRや多職種連携教育を主に担当するほか、コロナ禍では名市大での学内教育のICT化にも尽力した。

ChatGPT、論文作成でどう使う？

岩手医科大学いわて東北メディカル・メガバンク機構
永井 雅人



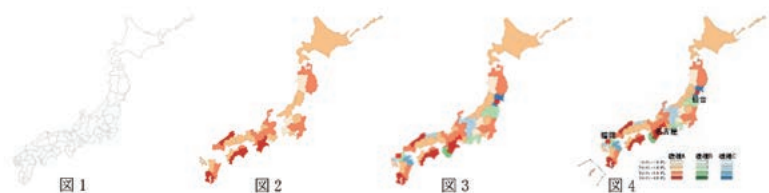
先日、無料版のChatGPT3.5を使って解析結果をRで日本地図に描画する機会がありましたので一例としてご紹介させていただきます。私は、Rは初心者レベルであり、ChatGPTもこの時初めて利用しました。

描画の内容は「加熱式タバコの機種A、B、Cの内、各都道府県で最も使われているのはどれか？その割合は？」です。まず、描画の過程を①白地図の作成、②都道府県ごとに最も使われている機種の使用割合の塗り分け、③特定の都市をプロット、の3段階に分け、それぞれChatGPTにプログラムを作成してもらいました。今では様々なプロンプトが公開されておりますが、この時は単純な質問をChatGPTに繰り返し入力していきましました。始めに①「Rで日本の白地図を作りたい、プログラムを教えて」と入力し、出力されたプログラムを実行すると白地図が作成されました(図1)。次に白地図の元となったデータセットに解析結果をマージし、②「Rで白地図を作成した、機種Aの値で地図を塗り分けるプログラムを教えて」と上記

で作成したプログラムと共に入力しました。出力されたプログラム(実行結果：図2)を参考に機種B、機種Cについて塗り分けるコードを自身で追加した後、再度このプログラムと共に③「仙台市、名古屋市、福岡市をプロットしたい、プログラムを教えて」と入力しました。出力されたプログラムを一部修正し、実行した結果の図3をパワーポイントで編集し、論文に使用する図4が得られました。

以下、今回ChatGPTを使用した所感です。まず、現時点では2021年9月までのデータしかChatGPTの学習データに使われていません。Rの新パッケージやアップデートに対応していないこと、外部のデータを参照する際、参照元のデータが古い、更新されている、リンク切れなどがありました。

その結果、出力されたプログラムが上手く動かないことがありました。この場合、1.自身で正しい参照元や値などを設定する、2.ChatGPTにプログラムと共に「別のパッケージを使って〇〇して」、「他の参照元を使って〇〇して」と追加入力することで別のプログラムが出力され、問題を解決できました。また、プログラムを実行しエラーが出た際、エラーコメントとプログラムと共に「エラーの原因を教えて」、「エラーを修正して」と入力すると、エラーの原因を説明してくれ、修正されたプログラムが出力されました。全体を通じて、ChatGPTは統計解析やそのプログラムについて気軽に尋ねることが可能なツールであると感じました。



■プロフィール

2006年岩手大学教育学部卒業、2008年宇都宮大学大学院教育学研究科修了(修士(教育学))。日本学術振興会特別研究員DC 1として肥満に関する疫学研究を行い、2011年に東北大学大学院医学系研究科修了(博士(医学))。以降、滋賀医科大学、福島県立医科大学、東北大学、千葉大学、東京医科歯科大学、大阪医科薬科大学にて、特任助教や助教として循環器疾患や東日本大震災などに関する疫学研究に従事。2023年に岩手医科大学いわて東北メディカル・メガバンク機構臨床研究・疫学研究部門の特命講師に着任し、現在に至る。

第34回日本疫学会学術総会 「疫学が創る未来社会」

第34回日本疫学会学術総会 会長
滋賀医科大学 NCD疫学研究センター センター長
三浦 克之



第34回日本疫学会学術総会を2024(令和6)年1月31日(水)～2月2日(金)の3日間にわたり、びわ湖大津プリンスホテル(滋賀県大津市)にて開催させていただきます。

本学術総会のメインテーマは「疫学が創る未来社会」です。

ここ数年、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行にあたって多くの疫学データが用いられたことは記憶に新しいところです。また、社会のすみずみから電子化された大規模データ(いわゆる「ビッグデータ」)が集積し、そのAIを用いた解析も急速に進歩しています。一方、気候変動に代表される地球環境問題、さらには戦争が加わって、食糧問題やエネルギー問題が深刻化し、世界規模の問題として人類の生存と健康にも大きな影響を与えています。

このように疫学が取り組むべき課題は刻々と変化しています。

本総会では、これからの世界と日本の未来社会を創っていく上で、疫学がどのような役割を果たすのかを議論するとともに、次代を担う若い研究者の皆さまが新たなテーマを発見できる場としたいと考えています。農業経済学者による特別講演「経済学から読み解く「食」と未来社会」、メインシンポジウム「未来社会と疫学」など、必聴のプログラムが満載です。

研究者同士が対面で熱く議論し、語り合い、親睦を深めるため、皆さまぜひ現地にお越しください。1日目にはプレセミナーを4つ開催します。残念ながら現地参加ができない会員の皆さまにも主要プログラムをオンデマンド配信します。ぜひお早めに参加登録をお願いいたします。

大津は京都駅からローカル線で2駅、ほんの10分の便利なところです。総会会場は目の前に美しい琵琶湖が広がり、日頃の疲れが癒やされることと

思います。絶景のびわ湖大津プリンスホテルに宿泊されることをぜひお勧めします。会場前から遊覧船にも乗れますし、紫式部で有名な石山寺、三井寺、比叡山など近くに見所も多いです。大津で皆さまとお会いできることを楽しみにしております。



日本疫学会プレセミナー2024 開催決定

疫学教育推進ワーキンググループ長
大阪医科薬科大学
本庄 かおり

第34回日本疫学会学術総会(2024年1月、三浦克之会長・滋賀医科大学教授)において、「日本疫学会プレセミナー」を開催させていただくことになりました。本企画は、日本疫学会会員の人材育成・研究力の向上に資するセミナーや演習の機会の提供を目的に実施いたします。

日本疫学会プレセミナー実施にあたっては、日本疫学会の会員からセミナー企画・実施者を広く公募しました。申請のあった企画の中から、学術委員会・疫学教育推進WGにより、下記の魅力的な企画が選定されました。

企画1. JE編集委員会企画：よい論文を速く書くためにー生成AI活用術(初級～上級レベル)

【企画者】

片野田 耕太(国立がん研究センター)
後藤 温

(横浜市立大学 データサイエンス研究科)

【概要】よい論文を速く書く方法を、Paper of the Year 2023受賞論文の著者と生成AIの第一人者から学ぶセミナーです。受賞論文の経験談、生成AI総論、ChatGPTを使ったワークショップの3本立て。最新技術と、それを超えたところにある論文執筆の極意をぜひ学んでください！

【実施形態】ハイブリッド方式(現地参加：定員450名)+後日オンデマンド配信)

企画2. 時間を斬る！：生存時間解析における追跡時間の分割(split)の考え方と使い方

(初心者・初級レベル)

【企画者】

岩上 将夫(筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野)

篠崎 智大

(東京理科大学 工学部 情報工学科)

【概要】生存時間解析の基本は、曝露の有無・状態によって群分けを行い、追跡開始時点から追跡終了時点までの生存時間に基づいたノンパラメトリックorセミパラメトリックorパラメトリックな記述・比較を行う(回帰モデルを構築することである。しかし、例えば、(1)発生率、発生率比、ハザード比などが時間と共に変化すると想定される場合、(2)時間依存性曝露因子を扱う場合(追跡途中で曝露の有無・状態が切り替わる場合)、(3)自己対照研究を行う場合、などには、個々の生存時間を分割(split)して解析を行う必要がある。本セミナーの目的は、生存時間解析における追跡時間の分割(split)の考え方および使い方について学ぶことである。

【実施形態】ハイブリッド方式(現地参加：定員300名)+後日オンデマンド配信)

企画3. 生存時間アウトカムの因果解析—斬った時間をリスクに戻す、反事実アプローチによる整合的な解析法のすすめ

(中級・上級レベル)

【企画者】

篠崎 智大
(東京理科大学 工学部 情報工学科)

高橋 邦彦

(東京医科歯科大学 M&Dデータ科学センター)

【概要】対象者の追跡を伴うほとんどすべての疫学研究では、脱落や研究終了によるイベントの「打ち切り」が生

じます。打ち切りを含むデータに対しては、よく知られているように「生存時間解析」という統計手法があり、生存時間解析法は実用的な手法ですが、打ち切りに対処するための方法によって推定目標(estimand)が決まってしまう点に問題があります。つまり、率やハザード比が本当に知りたいからではなく、人年法やCox回帰という手法を使う必要性からこれらの指標が報告されてしまうことが常態化しています。このような本末転倒に陥らないように、本セミナーでは因果推論(causal inference)の枠組みから、打ち切りを伴う結果変数(生存時間アウトカム)に対して、ハザードでなくリスクに着目した因果推論の考え方から群間比較の統一的な原理と手法を学びます。

【共催】日本計量生物学会

【実施形態】ハイブリッド方式(現地参加：定員450名)+後日オンデマンド配信)

企画4. データベース研究のデザインと実践：明日からできる！データベース研究

(初心者・初級レベル)

【企画者】

杉山 大典

(慶應義塾大学 看護医療学部)

漆原 尚巳(慶應義塾大学 薬学部)

【概要】昨今、データベース研究の隆盛は目を見張るものがあります。そこで、「データベース研究を基本的なところから理解したい」「これからデータベース研究をしたい」という初学者向けに、「データベース研究と従来の疫学研究はどう違うの?」「データベース研究はどう進めたらよいの?」といった疑問を解消するための

セミナーを企画しました。また、セミナー内では、日本疫学会・日本臨床疫学会・日本薬剤疫学会の3学会共同で運用しているアウトカム定義を集積・登録・公開・共有するためのレポジトリであるOutcome Definition Repository (ODR)を利用してデータベース研究の鍵となるコード定義の具体的な手順についての実践的なワークショップも行います。

【共催】日本薬剤疫学会、日本臨床疫学会

【実施形態】ハイブリッド方式(現地参加：定員75名)+後日オンデマンド配信)

プレセミナーは2024年1月31日(木) 13:00~17:30開催予定です。

各セミナーの時間、場所、概要、申し込み方法等は総会HP

(URL: https://jeaweb.jp/activities/seminars/individual.html?entry_id=1880)を参照してください。

皆さま奮ってご参加いただけますようお願い申し上げます。

日本疫学会サマーセミナー2023開催報告

疫学教育推進ワーキンググループ
横浜市立大学 医学部 公衆衛生学教室
後藤 温

2023年8月26日(土)、日本疫学会サマーセミナー2023『疫学の面白さを体感!~「チョコレートとノーベル賞の因果」から疫学的エビデンスの落とし穴まで~』が開催されました。今年も新型コロナウイルスの影響を受け、ハイブリッド形式での開催となりました。現地会場は日本医科大学大学院棟で、オンライン参加者も多数いました。

本年度の講師は、情報・システム研究機構 統計数理研究所 / 総合研究大学院大学 先端学術院 教授である野間久史先生にご担当いただきました。セミナーの前半では、野間先生が疫学と統計学の歴史、John Snowとコレラの防疫、統計学者としてのナイチンゲール、チョコレートとノーベル賞の因果、ホルモン補充療法に関するコホート研究とランダム化比較試験の結果の矛盾、COVID-19の臨床疫学研究、傾向スコア法など、多岐にわたる重要なトピックについて、分かりやすい解説を行っていただきました。医療統計学の第一人者でもある野間先生より、Kenneth Rothman教授による「疫学とは、良く脚色された統計学をはるかに超えたものである。」という言葉

解説いただいたことは非常に印象的でした。

後半では、参加者は複数のグループに分かれ、疫学教育推進ワーキンググループと疫学会若手の会の有志によるチューターのファシリテーションのもと、グループワークが実施されました。SGLT 2 阻害薬の心血管疾患予防効果を検証したランダム化比較試験(EMPA-REG試験)とReal World Dataによる大規模データベース研究(CVD-REAL研究)の結果の相違とその原因・解釈について、各グループでディスカッションが展開されました。

セミナーの終了時には、グループワークで出た議論の内容を全体で共有し、野間先生が不死時間バイアス(immortal time bias)によってCVD-REAL研究でSGLT 2 阻害薬が有利な結果として推定されていた可能性について、分かりやすく解説していただきました。このセッションは、多くの参加

者にとって有意義な時間となったようです。

事後アンケートでは、「セミナーの内容が非常に参考になった」という声や、「疫学の理解が深まった」という感想が多く寄せられました。

本イベントの成功は、素晴らしい講義をしていただいた野間久史先生、会場を提供してくださった日本医科大学の皆さま、日本疫学会若手の会有志、疫学教育推進ワーキンググループの皆さま、そして何より参加者の皆さまのおかげです。厚く御礼申し上げます。

以上、日本疫学会サマーセミナー2023の報告となります。



疫学専門家認定制度 5年目を迎えて ～経過措置の終了と更新の開始予告～

疫学専門家委員長
浜松医科大学 健康社会医学講座
尾島 俊之



日本疫学会の「疫学専門家認定制度」は、2019年に発足しました。その背景には、根拠に基づく医療・公衆衛生政策などの重要性が広く認識されるようになり、疫学研究を遂行・支援できる専門家のニーズが高まっていること。また、研究費の申請の際に疫学の専門家の関与の有無を記載するようになったことから、何をもって疫学の専門家といえるのかという基準が求められるという時代の要請がありました。

この制度によって期待されるメリットには、1つ目に疫学研究者の質の向上があります。2つ目には就職や昇任においての活用があげられました。3つ目は、新しい研究への参画の機会の増加です。臨床等の研究班を組織するときに、疫学の専門家にも研究班に入ってもらおうと考えて、疫学専門家・上級疫学専門家取得者に声がかかること、

また研究班を組織する当初から疫学者が関わることで適切な研究計画立案による質の高い研究が増えることが期待されます。そして4つ目に、疫学研究者になることの魅力が増して、疫学研究者が増加することが期待されました。

今年この制度発足から5年目となります。現在、上級疫学専門家は320名、疫学専門家は66名となっており、今後の各分野での活躍がますます期待されます。

さて、発足当初より経過措置として行っていた「疫学専門家」と「上級疫学専門家」の同時申請は、昨年で終了しました。今後、若手疫学研究者の皆さまには、まずは、疫学研究実施の基本的な知識と実績により疫学専門家を取得していただき、そして、疫学研究業績の蓄積に加えて、疫学研究の主導、コンサルテーション、疫学

者の育成・指導の実績を積み上げて、上級疫学専門家を目指していただきたいと思います。

一方、2020年にはじめて上級疫学専門家ないしは疫学専門家を取得された方々が、来年2024年に早くも更新の時期を迎えます。特に上級疫学専門家の先生方のたゆまぬ研究と教育活動の積み重ねが、上級疫学専門家の継続につながっていくと考えられます。今からでもじっくり準備を行っていただきたいと思います。

最後に、この制度および認定は、疫学専門家委員会、出題委員、ブラッシュアップ委員、そして認定審査委員をはじめ、多くの方々のご尽力に支えられています。心から深謝するとともに、さらに多くの研究者が専門家に認定され、様々な分野で活躍されることを期待しています。

研究室紹介

東北大学大学院歯学研究科 国際歯科保健学分野 地域に根差した国際研究を！

小坂 健



国際歯科保健学分野は、平成16年度に開設されました。これまで国際的な感染症のアウトブレイク対応や感染研でサーベイランスなどを担当し、厚労省で介護保険の制度設計、がん検診などの保健事業に関わってきた小坂が初代教授として着任しました。相田潤先生（現

東京医科歯科大教授）をスタッフとして迎え、近藤克則先生が主宰されている日本老年学的調査研究JAGESへの参画や、岩沼市での介護予防の複合型サービスから震災前後の人々の健康についてハーバード大学と連携したIwanuma Studyなど地域と連携した研

究活動を実施してきました。

現在は、名古屋大学から竹内研時准教授（リエゾンセンター特命教授）を迎えて、新たな研究分野へ幅を広げています。JAGESの東北事務局を継続しつつ、医学部との健康日本21関連、東北大学メディカル・メガバンクとの連携、

九州大学の福田治久先生が実施しているLIFE Study、大阪国際がんセンターの田淵貴大先生のJACSIS研究等との連携を深化させており、地域のレセプトデータ、特定健診や歯科健診などのデータに加えて、コロナ禍での人々の行動の変化、ワクチンの有効性、ゲノムやメタボローム解析まで幅広いコホートやリアルワールドデータを分析することが可能となっています。様々な国からの留学生を迎えておりますが、これまでハーバード大学Ichiro Kawachi教授の研究室、英国UCLのRichard Watt教授等と連携してきましたが、今後アジア地区との連携を深めていきます。草間太郎助教(歯学イノベーションリエゾンセンター)、木内桜助教(学際科学フロンティア研究

所)、Hazem Abbas助教(国際連携推進部門)、Upul Cooray助教等と一緒に研究活動を続けています。

これまで多くの卒業生が、地域との関わりのなかで行政にも興味を持ち、

厚生労働省や北海道庁、秋田県庁、東京都庁、滋賀県庁等の自治体等でも活躍しています。興味がありましたらぜひ遊びに来てください。



一般社団法人日本疫学会代議員・選出理事・監事・理事長選挙について

一般社団法人日本疫学会定款、代議員および役員の選任に関する細則に基づき、下記の日程で、2023年度日本疫学会代議員・選出理事・監事・理事長選挙を実施しました。

●代議員選挙

立候補受付(3/14~4/30)、告示(5/31)、電子投票(6/14~6/28)、開票(6/28)、結果報告(6/29)

※北海道・東北ブロック、中国・四国ブロック、九州・沖縄ブロックの代議員選挙は、候補者数が定数と同数でしたので、無投票当選となり、投票は行いませんでした。

●選出理事・監事選挙

選出理事立候補・監事推薦の受付(7/5~7/25)、告示(8/1)、電子投票(8/21~9/4)、開票(9/4)、結果報告(9/5)

※北海道・東北ブロック、東京ブロック、中部ブロック、近畿ブロック、中国・四国ブロックの代議員選挙は、候補者数が定数と同数でしたので、無投票当選となり、投票は行いませんでした。

●理事長(代表理事)選挙

告示(9/8)、立候補届出(9/8~9/21)、投票受付(9/26~10/12)、10/16に開票し、11/10に開催される理事会で結果報告を行う予定です。

会員各位のご支援で円滑に選挙を実施することができました。選挙管理委員を代表し、ご報告と御礼を申し上げます。

2023年10月15日
選挙管理委員長 福田 吉治

事務局だより

1) 会費納入のお願い

2023年度(2022年12月～2023年11月)までの会費を納入いただいていない方は、すみやかにお支払いくださいますようお願い申し上げます。会費の納入状況は、会員専用サイトの登録内容確認・変更ページでご確認いただけます。

2024年度の会費につきましては、12月にご請求させていただきます。

2) ご登録情報更新のお願い

会員専用ページ(<https://coco.cococica.com/jea>)にログインいただき、【登録内

容確認・変更】ページにて、ご登録情報を更新してください。(IDはご登録のメールアドレスです。パスワードをお忘れの場合は、ログイン画面で再設定できます。)会費のお支払い状況もご確認いただけます。

なお、10月下旬には新会員登録システムへの移行が行われるため、一時期会員専用ページへのアクセスができなくなります。詳細は、後日お知らせいたします。ご不便をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

3) JE冊子購読のお申込み

Journal of Epidemiologyの冊子の年間購読料(2号合本、年6回発行)は、会員:9,000円、非会員:26,000円(ともに国内送料込)です。2024年のご購読(Volume 34)をご希望の方は、事務局にお申込みください。

4) 日本疫学会会員数:2,652名

(2023年10月1日現在)

名誉会員:33名 代議員:232名

普通会员:2,619名

編集後記

「コヤマさんの好きなことをテーマにしていから！」と広報委員会副委員長の近藤尚己先生に背中を押され、私が今、知りたい、“ChatGPT”をテーマに特集を組ませていただきました。特集記事をご執筆いただける先生を探している過程で、たまたま次回の学術集会でもプレセミナーが開催されることを知り、大会長である三浦先生からのメッセージも含め、今から楽しみになっています。私、広報委員と並行して、疫学若手の会の世話人もさ

せていただいております。疫学会初日の若手の集いについても、夏の暑い時期からWeb会議を重ねて企画を練っております。そちらもお楽しみにしていただけたら嬉しいです。

最後になりましたがご寄稿いただきました先生方、支えてくださった学会事務局の糟谷様や広報委員会の先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

(大阪国際がんセンター 小山 史穂子)

新型コロナウイルス
関連情報

【広報委員会より】

新型コロナウイルス関連情報特設サイト(<https://jeaweb.jp/covid/>)を、2020年3月2日に開設し、疫学的用語等の解説、研究紹介、有用なリンクの他、学会からの要望書を掲載しています。会員からの積極的な情報提供やご意見を期待しています。

発行 一般社団法人 日本疫学会 〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-2 本郷MTビル4階 ☐ jea@jeaweb.jp

©Japan Epidemiological Association All Rights Reserved.